

「チャンドス卿の手紙」 (ホーフマンスタール)

英國の若き文人チャンドス卿は友人フランシス・ベーコンに手紙を書いて、文學の仕事を断念する決意を披瀝する。「橋をかけるすべもない奈落」が、己れの物と云ふさへ躊躇される程「疎まし」く感じられる過去の仕事からも、未來に夢見る仕事からも、己れを隔ててゐるとしか思へない、といふのだ。

例へば、誰もが氣安く用ひる類の言葉が段々口に出来なくなつて來て、取分け「精神」だの「魂」だのといふ「抽象的な言葉が、ぼくの口中で腐つた茸のやうに碎け散つてしまつた」のだと彼は云ふ。或時、他愛の無い嘘をついた四歳の娘を窘めて、「いつも本當のことをいはなくてはいけないよ」と諭さうとした途端、酷く氣分が悪くなり、慌てて部屋を飛出した事があつたが、やがて人々の談話などを聞いてゐても、「わけのわからぬ怒り」を感じる様になり、誰さんは善人だとか、彼さんは悪人だとか、人々が氣安く云ふと、さういふ談話の中の全ての事柄を「氣

味の悪いほど「事細かに吟味せざるを得なくなつた。顕微鏡で小指の皮膚の一部を観察した時、「溝や穴のある原野」さながらに見えた事があつたが、人事一般についても同様の印象に襲はれ、自分には「もう何事も單純化してしまふ習慣の目」によつてそれらを捉へる事が出来なくなつて了つたと云ふのである。

だが、その一方、庭や畑に置き去りにされた如露や鍬、日溜りに寝そべる犬、小さな農家といふ類の、顧みる人も無い見窄しい物象が「崇高な感動的な特徴を帯びて」立ち現はれ、「その特徴を記述するには、言葉といふ言葉はすべて貧しすぎる」とさへ思へる事もあるのだとチャンドスは云ふ。それらが美しい戀人にもまして大切に感じられ、我々が「心臓で考へるやうになる」ならば、「新しい豫感にあふれた關係を、存在全體と結」べるのではないかとすら思へる程なのだが、自分と「世界全體を織りませたこの調和」が、本質的に如何なるものなのか、如何にして自分の感覺に働きかけて來たのか、「理の通つた言葉で述べる」事は決して出来まいと彼は書き、最後に、それを表現する爲には「單語の一つすらぼくには未知の言語」を用ひるしかないのかも知れないと結ぶのである。

現代ドイツ文學の先驅と云はれる、フーゴー・フォン・ホーフマンスタールの一九〇二年の

作品である。ヘルマン・ブロッホが書いてある通り、「傳統的な言葉の不十分さ、言葉が語彙の点でも文章の点でも凝固したステロ版と化した」事への「狂暴な憤怒の嘔吐感」(菊盛英夫譯)ゆゑに、チャンドスは文學否定、「言語否定」へと追ひやられる譯だが、やはりブロッホが云ふ様に、「眞實の言語愛は言語否定なしにはありえない」。チャンドス即ちホーフマンスタイルが文學を斷念するのは、「何事も單純化してしまふ習慣の目」に基かぬ言語、「凝固したステロ版」ならざる言語を自らに飽迄も厳しく要求したからであり、そして又、個我と存在全體とを結びつける「調和」なるものを言語によつて、「未知の言語」によつても表現したいと強烈に祈念したからに他ならない。その祈念を彼は生涯棄てる事はないが、その場合にも、言語否定が言語愛の所産であつたのと同様、「調和」への夢は、それと全く相反する恐るべき現實の混沌の認識を齎さずには措かない。ライフワークの戯曲「塔」がその何よりの證左だが、さういふ眞正の二元論のデアレクティークが吾國には育たない。總じて「何事も單純化してしまふ習慣の目」を怪しまないから、平和は絶対善で戦争は絶対惡だといふ類のステロタイプの議論ばかりが横行する事になる。